

# 鳥鳴く朝のちい子ちゃん

小川未明

青空文庫



ちい子<sup>こ</sup>ちゃんは、床<sup>とこ</sup>の中<sup>なか</sup>で目<sup>め</sup>をさしました。うぐいすの鳴<sup>な</sup>き声<sup>こえ</sup>が、きこえてきました。

「おや、ラジオかしら。」

このごろ、いつもお休<sup>やす</sup>み日<sup>び</sup>の朝<sup>あさ</sup>には、小鳥<sup>ことり</sup>の鳴<sup>な</sup>き声<sup>こえ</sup>が放<sup>ほう</sup>送<sup>そう</sup>されたからです。しかし、その声<sup>こえ</sup>は、お隣<sup>となり</sup>の庭<sup>にわ</sup>の方<sup>ほう</sup>からきこえてくるような気<sup>き</sup>がしました。あちらには、梅<sup>うめ</sup>林<sup>ばやし</sup>があるし、木立<sup>こだち</sup>もたくさんしげっていますから、どこからかうぐいすが飛<sup>と</sup>んできて鳴<sup>な</sup>いているのでないかとも、思<sup>おも</sup>われました。

「お母<sup>かあ</sup>さん、あれラジオのうぐいすなの。」と、ちい子<sup>こ</sup>ちゃんは、聞<sup>き</sup>きました。

とつくに起きて、家の中で働いていらした、お母さんは、

「ほんとうのうぐいすですよ。花が咲いているから、飛んできたのです。さあ、あんたも早く起きて、お顔を洗いなさい。いいお天気ですよ。」と、おっしゃいました。

「ああ、そうだ。日曜学校へいって、先生からお話を聞いて、それから、とみ子さんや、まさ子さんといっしよに遊ぶ、お約束がしてあったのだ。」と、思い出すと、ちい子ちゃんは、すぐに床から出ました。

空は、緑色にすみわたっていました。朝日がさして、木々の葉はいきいきとかがやいて、いい気持ちであります。

ちい子ちゃんは、ご飯をいただいてから、お机の前でまごまご

していました。お母さんに髪を結ってもらって、時計を見ると、じき八時になります。

「あら、おくれたらたいへん。」といって、お玄関で、げた箱からくつを出してはいて、お家を出ました。

さつきのうぐいすでしょう、こんどは、どこか遠くの方で鳴いている声が、きこえてきました。垣根のそばを歩いていくと、赤いつばきの花の咲いた家があります。ご門のところに、ぼけの花のいっぱい咲いている家もありました。またお庭に白い花の咲いた、高いこぶしの木のある家もありました。そして、ちい子ちやんが、広い通りへ出ようとしたとき、一軒のご門の前に、一人のおばさんが、ふろしき包みをかかえて、紙片を持って、門

札をながめながら、ぼんやり立っているのを見ました。ちい子ちゃんが近づくと、

「お嬢ちゃん、川上さんという家をござんじありませんか。」  
と、お婆さんは、聞きました。

「川上さん？ 私、知らないわ。」

「番地を書いてもらってきたのですけれど、この番地が見つからないのですよ。」

お婆さんは、家政婦さんか、女中さんでありました。雇われるお家がわからなくて、困っているのです。ちい子ちゃんは、しろあたら  
白い新しいたびをはいているお婆さんが、なんとなく気の毒になりました。

「おばさん、待<sup>ま</sup>っていていらつしやい。」

ちい子<sup>こ</sup>ちゃんは、あちらの角<sup>かど</sup>にあつた、たばこ屋<sup>や</sup>へ飛<sup>と</sup>んでいき  
ました。そして、川<sup>かわ</sup>上<sup>かみ</sup>という家<sup>いえ</sup>をたずねたのです。

「ああ、川<sup>かわ</sup>上<sup>かみ</sup>さんですか。このごろ、越<sup>こ</sup>してきた方<sup>かた</sup>でしょう。  
こちらの路地<sup>ろじ</sup>を入<sup>はい</sup>って、つき当<sup>あ</sup>たりの家<sup>いえ</sup>です。」と、たばこ屋<sup>や</sup>で  
教<sup>おし</sup>えてくれました。

ちい子<sup>こ</sup>ちゃんは、あちらに立<sup>た</sup>っていた、おばさんのところへ飛<sup>と</sup>  
んでいって、知<sup>し</sup>らせてやりました。

「お嬢<sup>じょう</sup>ちゃん、どうもありがとうございました。」と、おばさん  
は、喜<sup>よろこ</sup>んで、いくたびも頭<sup>あたま</sup>を下<sup>さ</sup>げました。

ちい子<sup>こ</sup>ちゃんも、うれしかったのです。往<sup>おう</sup>来<sup>らい</sup>へ出<sup>で</sup>ると、人<sup>ひと</sup>が

たくさん通とおっていました。草花屋くさばなやが、手車てぐるまの上うえへ、いろいろの草花くさばなの鉢はちをのせて、「草花くさばなや、草花くさばな。」といいながら、引ひいていきました。

どこを見みても、もう、すっかり春はるの景色けしきです。教会堂きょうかいどうのどがった屋根やねが見みえていました。

神かみさまは 軒のきの

こすずめまで

おやさしく いつも 愛あいしたもう

ちい子こちゃんは、うたいながら、教会堂きょうかいどうまで走はしっていくと、

はや、お説せつきょう教がが、はじまっています。みんなが、静しずかにし

ていますので、ちい子こちゃんは、お説せつきょう教の終おわるまで、外そとに

待<sup>ま</sup>つていようと思<sup>おも</sup>いました。

ドアの外<sup>そと</sup>には、子供<sup>こども</sup>たちのげたが、ちらばっています。ちい子<sup>こ</sup>ちゃんは、それを一つ、一つ、きちんとならべました。また、げたばこの下<sup>した</sup>に投げ出<sup>だ</sup>してあつたスリッパを、箱<sup>はこ</sup>の中<sup>なか</sup>へ収<sup>おさ</sup>めていました。

ちい子<sup>こ</sup>ちゃんは、お説<sup>せつぎよう</sup>教<sup>きょう</sup>のあとで、子供<sup>こども</sup>たちが、幾<sup>いくくみ</sup>組<sup>ぐみ</sup>かに分<sup>わ</sup>かれて、先<sup>せんせい</sup>生<sup>せい</sup>から聞<sup>き</sup>くお話<sup>はなし</sup>をたのしみにしていました。

「まさ子<sup>こ</sup>さんや、とみ子<sup>こ</sup>さんは、どこにいらつしやるだろう。」  
と、ドアのすきまから、内<sup>うち</sup>をのぞいたので。けれども、みんながあちらを向<sup>む</sup>いて、同<sup>おな</sup>じ頭<sup>あたま</sup>をしているので、よくわかりませんでした。  
高<sup>たか</sup>窓<sup>まど</sup>の色<sup>いろ</sup>ガラスから流<sup>なが</sup>れる、黄<sup>きむらさき</sup>や紫<sup>むらさき</sup>や、青<sup>あお</sup>の光<sup>こう</sup>線<sup>せん</sup>は、

ふしぎな夢の国を思わせました。壁にかかっている、いつもにこやかなお顔のマリアさまは、手をさしのべて、みんなの頭をなでていてくださいました。ちい子ちゃんは、びつくりしました。

「おばあちゃん、おんも……よう。」と、このとき、坊やが、わめいたからです。みんなは、だまって、牧師さまのお話を聞いているのに、坊やだけは、わからないから、外へ出たいというのでした。

「おとなしく、じつとしていらっしやい。」と、大きな声で、おばあさんが、いつています。

急に、この二人の声で、ほかの人たちは、牧師さまの声が、耳に入らないので、困っているようでした。

「おばあちゃん、おんもよう。」と、坊やは、腰かけから立ち上がって、すねています。

「外へ、いくのかい。」

みんなが、おばあさんの方をふり向きました。しかし、おばあさんは、平気なものです。

「どうぞ、しずかにしてください。」

牧師さまは、たまりかねて、おばあさんに注意なさいました。「さ、さ、おんもへいきましよう。」と、おばあさんは、孫の手を引いて、ドアの方へやってきました。

「あら、小西のおばあさんだわ。」と、ちい子ちゃんは、目をま  
るくしました。

こにし  
小西のおばあさんは、つんぼで、人のいうことが、よくきこえぬのです。だから、自分も、自分も、大きな声を出して、なんとも思わなければ、また、みんなに迷惑めいわくをかけることもわからないのでした。

おばあさんが、坊ぼうやをつれて、ドアの外そとへ出ましたから、そこに立たっていた、ちい子こちゃんは、おじぎをしました。

「だれかと思おもつたら、ちい子こちゃんですか、あんたは、いまいらしたの。」と、おばあさんは、大きな声こえでいいました。

「きれいに、だれが髪かみをゆってくださいましたの。」

「お母かあさん。」と、ちい子こちゃんは、答こたえました。

「まあ、赤あかいリボンをつけて。」

おばあさんの声こゑが、よくへやの内うちへ聞きこえるので、みんなが、こちらを向むいています。

ちい子こちゃんは、きまりがわるくなりました。

「坊ぼうや、おいで。」

ちい子こちゃんは、坊ぼうやをつれて、教き会よう堂かいどうの横よこ手ての方ほうへいき  
ました。そこには、桜さくらの木きがあつて、花はなが咲さいていました。腰こしか  
けや、すべり台だいなどがありました。

もう、花はなが、ちら、ちら散ちつています。坊ぼうやは、それを拾ひろつて  
いました。

「坊ぼうや、すわると、おべべが、よごれるよ。」

おばあさんが、大おおきな声こゑでいいました。ちい子こちゃんは、ここ

なら、みんなのおじやまにならぬと思つて、安心あんしんしていました。

ちい子こちゃんが、ベンチに腰こしかけていると、おばあさんが、そばへきて、

「あなたのおくつは新あたしいの、いつ買かつてもらつたの。」と、聞ききました。

「こないだ、学が校こうへ上あがつたときよ。」と、ちい子こちゃんは、答こたえました。

「いま、おくつは、お高たかくなつたんでしよう。」と、おばあさんは、いろいろのこを話はなしました。坊ぼうやは、拾ひろつた花はなびらを、またまいていました。花はなびらは、ひらひらと白しろいちようちようのように、風かぜに舞まいました。

「ちい子ちゃん、あんた忘れたでしょう。小さいとき、道を歩いていて、前へいくよそのお姉さんを見て、お母さん、あんなくつよ、わたしほしいわといったことを。そのお姉さんのくつは、かかとの高い、さきのがった、ハイカラのおくつで、ダンサーか、女優さんのはくくつで、あんたが、そういったものだから、通る人がみんな見たのでそのお姉さんは、きまり悪がつて気の毒だとお母さんが、おつしやいました。」と、おばあさんが、いいました。

「おばあさん、ハイヒールでしょう。」

「そう、そう、そのハイヒールとかいうくつです。ちい子ちゃん、くつはあんなのより、やはりこうした、かかとの平らな、すこし

「おお、大きいぐらいのが体のためにいいのですよ。」

「おばあさんは、たいくつなもので、だれとでも話したかったのです。」

「ちい子ちゃん、そんなこと覚えていますか。」

「わたし、忘れたわ。」

「みんな小さいときのことは、忘れてしまうものかね。」

「そのとき、坊やは、ひとりで歩いて、教会堂の門から、外の方へ出ていこうとしていました。これを見つけた、おばあさんは、

「あ、坊や、ひとりでいつては、あぶないよ。」と、もう、ちい子ちゃんのことなど忘れて、坊やの後を追っていきました。」

「ほんとうに、私わたし、そんなことがあつたかしらん。」

ちい子こちゃんは、いまごろ牧師ぼくしさまのお説教せつきょうが終おわつて、先生せんせいのお話はなしがはじまる時分じぶんだと思おもつて、ドアほうの方ほうへ、足音あしおと軽かるく歩あるいていきました。そして、静しずかに中なかへ入はいつていきました。ちい子こちゃんは、かわいいお嬢じょうちゃんです。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「夜の進軍喇叭」アルス

1940（昭和15）年4月

※表題は底本では、「鳥《とり》鳴《な》く朝《あさ》のちい子《こ》ちゃん」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年4月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 鳥鳴く朝のちい子ちゃん

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>